

連載

高大接続の課題に迫る

第5回

事例 東北大学

入学者の 英語力向上を 図るために

今号の連載「高大接続の課題に迫る」は、前号に引き続き、実際の高大接続の課題に向き合っ、それに対応する大学の事例を取り上げる。東北大学は、建学以来「研究第一」「門戸開放」「実学尊重」の精神を基に世界水準の研究と教育を実践してきた。学生の英語力向上についても高い目標を掲げる同大学だが、入学してくる学生の力には課題があるという。いくつもの文部科学省による事業採択も受けながら、同大学が実施する英語力向上の施策のうち、学生の英語でアウトプットする力 (Speaking、Writing) の強化や海外研修の取り組みを紹介する。

全米最大の留学生受入機関ELSの メソッドとプログラムで英語力向上へ

TEA's English プログラムで 留学目標の英語力を育成

1907(明治40)年、日本で3番目に建学された帝国大学を前身とする東北大学は、現在、文・教育・法・経済・理・医・歯・薬・工・農の10学部、16の大学院研究科、3の専門職大学院、6の附属研究所を擁する。教員約3180人、職員約3200人、学生総数は約1万7900人である。

2014年、文部科学省「スーパーグローバル大学創成支援(SGU*)トップ型」に採択された同大学は、グローバル・マインドを全ての学生に持たせることを目指し、留学を推進している。そのためさまざまな支援を行う機関として、2014年、関連する部署を統合して「グローバルラーニングセンター」(以下、GLC)を設置した。総長特別補佐(国際交流担当)の山口昌弘GLC長は、センターの位置付けを次のように説明する。

「2014年4月、教養教育を全学で一体的に展開していくため、組織改革を行って『高度教養教育・学生支援機構』を設置しました。GLCもこの機構内に位置付けられていますが、

これは、グローバル・マインドも教養の一つとして教育していこうという、本学の意志の表れです」

そのGLCが、2015年度、「Tohoku University English Academy」を設立し、英語教育プログラム「TEA's English プログラム」を開始した(図1)。このプログラムの特徴は、長期留学の際、入学要件として必要なTOEFL対策をベースとして英語力の強化を図ると同時に、海外の大学での授業受講に必要なスタディスキルズも育成する内容としていることだ。「留学するのは早い学年であるほどよいので、留学に必要な英語力の育成とスタディスキルズの習得に特化したプログラムを、1年生から受けられるように考えました」と、山口GLC長は説明する。

英語のコミュニケーション能力を高めるには、「聞く、話す、読む、書く」の4技能をバランスよく習得することが重要だが、一般的に高校3年生では大学入試に向けてインプット(Reading、Listening)中心の学習となり、アウトプット(Speaking、Writing)の機会から遠ざかってしまうという課題がある。その傾向は東北大学の入学者も例外ではなかった。入学後、正課の英語授業でもアウトプット重視の内容を展開しているが、留学に必要な英語力を育成するためには、正課に加えて、更に多くの時間数が必要となる。

一般に、4技能試験であるTOEFL iBTを5点伸ばすためには100時間程度の英語学習が必要といわれている。東北大学の平均的な学生が、海

外の大学に長期留学できる基準のTOEFL iBT 80に達するには、600時間以上の英語学習が必要になるという。

「学生にはそのことを伝え自主学習を促していますが、学生が英語を学習できる環境を正課以外にも提供することが必要だと考えました。本学の学生は、入学前に文法や語彙などの基礎をしっかりと習得しています。アウトプットの力を補強すれば、英語でのコミュニケーション能力を高められると考えました」(山口GLC長)

また、海外の大学の授業形式は、教員と学生、学生同士が議論しながら進めるスタイルが主流となる。ノートテイキングなどの学習スタイルも講義形式の授業とは異なるため、それらのスタイルに留学前に慣れておけば、留学への不安が軽減されるだろうと、山口GLC長は考えたという。

「海外の大学の授業はアクティブ・ラーニングが主体です。本学でもそのスタイルを強化しつつありますが、講義形式の授業しか経験していない学生には、そのギャップを早めに埋めておく必要がありました」

日本で初めてELSの メソッドとプログラムを導入

この語学力・学習スタイルの両面で課題解決を図る方法として、全米最大の留学生受入機関「ELS Language Centers」が有するメソッドやプログラムを、日本の大学として初めて導入することにした。

ELSは、留学を目指す世界各国の学生に、外国語としての英語を教授



副理事、総長特別補佐
(国際交流担当)、高度
教養教育・学生支援
機構グローバルラー
ニングセンター長

山口昌弘

やまぐち・まさひろ

大学院理学研究科教授。
博士(理学)。学位プロ
グラム推進副機構長、国
際連携推進機構副機構
長を兼任。

* Super Global University の略。

する教育機関（語学学校）であり、これまで50年以上にわたり、140か国、100万人以上を指導してきた実績を持つ（詳細はP.23コラム参照）。TEA's English プログラムは、その指導メソッドと教育プログラムを取り入れるとともに、ELSスタッフの1ユニット（図2）が学内に常駐して、講座の実施運営、成績評価、学習支援などを行う体制を整えた。

通常授業期間のプログラムは、ELSのTOEFL 受検準備プログラムを、東北大学用にカスタマイズしたもので、全24回行われる。テキスト代は学生負担だが、受講料は無料だ。

また、夏季には集中講座として2種類の講座を実施。1つめは、大学の授業に必要なアカデミックな英語の運用能力向上を目的としたプログラムを実施する。2つめは、英語で研究論文を書くためのWriting力を高める講座で、受講生が自身の論文やレポートの完成に向けて講師から一対一の指導が受けられる、実践的な内容だ。

予想以上の受講生数となった体験プログラム

実施初年度の2015年度は、プログラムの学内周知を図るため、前期に短期で終わる全4回の体験プログラムを実施した。その受講生数は、GLCの想定を超えた170人で、1・2年生だけでなく、3・4年生や修士課程、博士課程の大学院生も受講していた（P.22図3）。

本プログラムを行う川内キャンパスには、全学の1・2年生と、文系4学部の3・4年生及び大学院生が主に通っている。そのため、受講生は、同キャンパスの学生が中心になるのではないかと、GLCは予想していた。しかし、ふたを開けてみると、仙台市内にある他の理系中心の3キャン

図1 「TEA's English プログラム」2015年度概要

体験プログラム

目的: ネイティブ講師による実践的参加型レッスンで学術英語と実践的な学習スキルを定着し、留学への心構えとモチベーション等を身につけるプログラムを短期間で体験する。

対象: 全学生（学部、大学院学生）

開講期間: 通常授業期間（前期）

受講回数: 週1回×4週間（全4回）

夏季集中プログラム

目的: アカデミック英語や研究論文執筆などの目的別の対策講座を約2週間の短期間に集中して受講し、海外の大学・大学院への留学や国際社会で働く際に必要とされる英語力の習得を目指す。

講座① Academic: 海外の大学や大学院に留学する際に必要とされる英語力を培う、2レベルあり。

講座② Academic Writing: 英語で研究論文を書くためのライティング力を高める。

対象: 全学生（学部、大学院学生）

開講期間: 夏季休業中

受講回数: 計10日間

通常期間（後期）プログラム

目的: ネイティブ講師による実践的参加型レッスンを通して、学術英語と実践的な学習スキルを定着させ、留学への心構えとモチベーション等を身につける。

対象: 全学生（学部、大学院学生）

開講期間: 通常授業期間（後期）

受講回数: 週2回×12週間（全24回）

*同大学の資料を基に編集部で作成

図2 「TEA's English プログラム」実施運営体制（ユニット）

●アカデミックディレクター（ネイティブ）

カリキュラム作成・センター管理・講師育成等を担う。全体を俯瞰し、ELS本部と連携しながら、適時プログラムの最適化を図る。

●ティーチャー（ネイティブ）

授業を担当するだけでなく、課題チェック・成績評価・学習アドバイス等を実施。

●アドミニストレーター（日本人）

授業資料の作成や出欠・提出物管理、授業申し込み、学習相談など、学生支援全般を担当。

*同大学の資料を基に編集部で作成

パスから、理系学部の3・4年生や大学院生の受講生が、わざわざ通ってくるケースが多かった。

「留学を考える3年生や大学院生は、『自分には英語力が足りない』などと課題意識が明確です。そうした学生にとって、『アメリカ最大の留学生受入機関であるELSのプログラムを学内で受けられる』というのは、とても魅力的だったのではないのでしょうか。留学希望者はしっかり情報収集をしているのだと感じました」

（山口GLC長）

予想以上に受講生数が多かったという点にも、山口GLC長は注目している。

「本学には、学内で行うTOEFL対策の正課外講座が他にもあります。しかし、残念ながら、受講生数が伸び悩んでいました。ところが、TEA's English プログラムは、予想以上に多くの学生が受講しています。おそらく、学生は本プログラムの特徴を十分に理解し、本来、アメリカ

に行かなければ受講できないプログラムであること、TOEFL iBTのスコア向上に実績のあるプログラムであること、スタディスキルズを学ぶことなどを評価したのだと思います。本プログラムの受講理由や満足度などのアンケート結果をしっかりと分析し、今後、留学希望者への支援策に反映したいと思います」

短期留学にも力を入れ 入学前海外研修も実施

GLCでは、長期留学への導入の意味も込めて、短期派遣留学プログラム「スタディアブロードプログラム(SAP)」に力を入れてきた。これは、春・夏の年2回、アメリカ、カナダ、インドネシア、タイ、ドイツなど(開催年によって派遣先は異なる)で3~5週間、語学研修や体験学習を行うもの。海外の協定校と連携し、長期留学をためらう学生にも参加しやすいプログラムを増やしてきた結果、2010年の開始時から3年間で派遣者数は3倍に増え、2014年度では主な海外研修・留学生数は400人を超えている。

このSAPの成功を受け、2014

年から、入学前から留学への意識を涵養することを目的とした「入学前海外研修」を実施している(図4)。2015年は、AO入試Ⅱ期及び科学オリンピック入試の合格者を対象とし、3月中の2週間、同大学の学術協定校であるアメリカのロサンゼルス郊外にあるカリフォルニア大学リバーサイド校で語学研修や異文化交流などを行った。入学前の海外研修は、国立大学としては初めての実施となっている。

2014年は17人、2015年は15人が参加。対象入試での合格者は約180人であり、その約1割が参加していることになる。3月には高校の卒業式も控えているため、1割というのはかなり高い割合だと捉えると、山口GLC長は語る。

「AO入試Ⅱ期や科学オリンピック入試に合格して入学する学生は、本学での学習目的が明確です。その意識の高さはこの研修でも見られました。私は引率を兼ねて一部の講座で学生の様子を見学しましたが、意欲的に学ぼうとしている姿が印象的でした。更に、入学後には、参加者の多くが、『東北大学グローバルリー

ダー育成プログラム(TGL、後述)に登録し、積極的に活動しています」

費用(渡航費、宿泊費、現地でのプログラム費用、保険料を含む)は約35万円で、東北大学基金から費用の一部を支援し、参加を後押ししている。

国際的素養を持つ人材を受け入れる AO入試の募集枠を拡大

また、2016年度入試で、経済学部、医学部保健学科、薬学部、工学部で、合計41人のAO入試の募集人員を増やす(同数の一般入試枠を削減)。高校では、近年、文部科学省「スーパーグローバルハイスクール(SGH)事業」でグローバル人材の育成強化が進んでおり、今後、コミュニケーション能力や問題解決力、英語の4技能などの国際的素養をより身につけた受験生が増えてくると予想される。そうした状況を受け、今後もAO入試の枠を段階的に増やしていき、受験生個別の能力や意欲を丁寧に評価して、各学部のアドミッション・ポリシーに合った学生をより多く受け入れる方針だ。

「本学では、10年後に学生の20%以上がTOEFL iBT 80以上(長期留学

図3

「TEA's Englishプログラム」 体験プログラム受講生数の内訳

学年	人数	専攻	人数
1年生	45	工学	38
2年生	30	経済学	29
3年生	43	文学	29
4年生	11	理学	28
修士1年	22	農学	16
修士2年	6	教育学	8
博士1年	3	法学	7
博士2年	2	医学	7
博士3年	7	歯学	4
その他	1	国際文化	4

注)専攻別の受講生数は、大学院生・学部生を合わせて集計(ただし、国際文化研究科は大学院生のみ)

*同大学の資料を基に編集部で作成

図4

入学前海外研修 ~ High School Bridging Program ~ 2015 概要

対象: AO入試Ⅱ期及び科学オリンピック入試合格者

期間: 3月中の2週間

場所: 東北大学の学術協定校アメリカ・カリフォルニア大学リバーサイド校

内容: 英語力アップの研修・ワークショップ、現地学生・高校生との交流、アフリカ系・ヒスパニック系・ネイティブアメリカンの文化体験、日系アメリカ人博物館・リトル東京等の見学など

定員: 15人

※2014年は17人、2015年は15人が参加

◎参加者の英語力は不問。応募に際しては、「どのような大学生活を送りたいか」についての500字程度の日本語のエッセイを提出。

*同大学の資料を基に編集部で作成

可能となる目安)を取得するという目標を立てています。2014年度は4%となり、今年度末までに5%の達成を見込んでいます。今、初等中等教育では、英語教育の改善やアクティブ・ラーニングの導入など、さまざまな教育改革が進められています。学校教育、ひいては社会全体で英語力を高めていこうとする取り組みが、本学の目標達成を後押しするものとして期待しています」(山口GLC長)

各種の事業効果で高まる学生のグローバル意識

このように、東北大学では、TEA's English プログラム、SAP、入学前海外研修などによって、学生に留学への意欲を涵養するとともに、英語力向上の筋道を整えてきている。それは、長期留学生数の増加が、今後、東北大学が飛躍するための鍵になると考えるからだ。

同大学は近年の文部科学省のグローバル系事業に連続して採択されている。2009年に「国際化拠点整備事業(グローバル30)」に採択され、学部において英語で学位の取得できる「Future Global Leadership プログラム」を立ち上げ、海外の学生が東北大学に留学しやすくした。

続く、2012年には、文部科学省「グローバル人材育成推進事業(現:経済社会の発展を牽引するグローバル

人材育成支援)」に採択され、2013年度には「東北大学グローバルリーダー育成プログラム(TGLプログラム*)」をスタートさせた。これは、学内で受ける3つのサブプログラムと海外研鑽サブプログラムの計4つで指定されている正課・正課外の科目等を受講してポイントを取得し、所定の条件を満たすと「東北大学グローバルリーダー認定証」または「TGLプログラム修了証」が授与されるというプログラムだ。

そして、2014年、SGUに選定され、現在、「東北大学グローバルイニシアチブ構想」を推進している。本構想を支える両輪となるのは、海外の有力大学と共同教育で推進する「教育改革」と、世界中からノーベル賞級研究者を招聘し若手研究者を育成する「研究力強化」だ。特に、教育改革で中心となるのが、「国際共同大学院プログラム」で、同大学が強みとする分野、注力する分野について、日本人の学生と外国の学生と一緒に英語で学べる大学院をつくることを目標としている。そして、学生1人に、同大学の教員と外国大学の教員が2人で指導する体制とし、学生は日本と海外を行き来しながら研究を重ね、研究者として育っていくという形である。

その実現に向け、学部段階の単位取得を伴う留学生数を、2013年度の206人から、2023年度までに1000

人とすることを目標にしている。

これらのグローバル化に向けた施策は、着々と学生の意識を世界へと向けている。SAPの参加者は年々増加。短期留学での経験で自信を付け、長期留学や海外インターンシップに挑戦する学生が増えている。また、TGLの登録者数は、2015年度初めで、開始当初の3倍となる約2000人となった。このうち約600人が1年生であり、この数は同大学の全1年生の約25%に上る。昨今よく指摘される学生の内向き志向は同大学でも見られていたが、上記のような変化から、学生のグローバル意識が高まってきていることがうかがえる。

「今後、長期留学生や外国人留学生が増えていけば、学内でも国際体験が出来る活動を更に拡充できるでしょう。学内外での国際体験が一般的なものとなっていくために、現段階では、希望者がためらわずに留学できる支援をTEA's English プログラムなどを通して行っていきたいと思えます」と、山口GLC長は語る。

将来的には、ELSが有するネットワークを活用し、日本人留学生の派遣及び外国人留学生の受け入れ拡大につながることも期待できる。グローバル30からSGUへと続いてきたグローバル化を更に飛躍させる重要な事業として、TEA's English プログラムを、今後も推進していく考えだ。

「ELS Language Centers」について

**アメリカを中心に
大学キャンパス内に
多く設置されている
留学生のための
英語力育成機関(語学学校)**

ELS Language Centersは、全米最大の留学生受入機関だ。創立以来、50年以上にわたり、世界140か国、100万人以上の留学生を輩出してきた。アメリカを中心に、カナダ・オーストラリア・ヨーロッパ・マレーシア・中国などにLanguage Centersを開校し、うち大半は大学のキャンパス内にある。長年、英語を母国語としない人たちに、留学のための英語を指導し、独自の指導メソッド・カリキュラム・教材などを確立している。ELSが指定するレベルを修了すれば、アメリカやカナダの600校以上の大学で、進学に必要な英語力基準を満たしていると見なされる。

◎ ELSのプログラムを取り入れた語学研修プログラムの情報提供について

(株)ベネッセコーポレーション 高大接続課 連絡先: 0120-369-740 受付時間: 10時~20時(土日・祝日を除く)

* Tohoku University Global Leader Program の略。